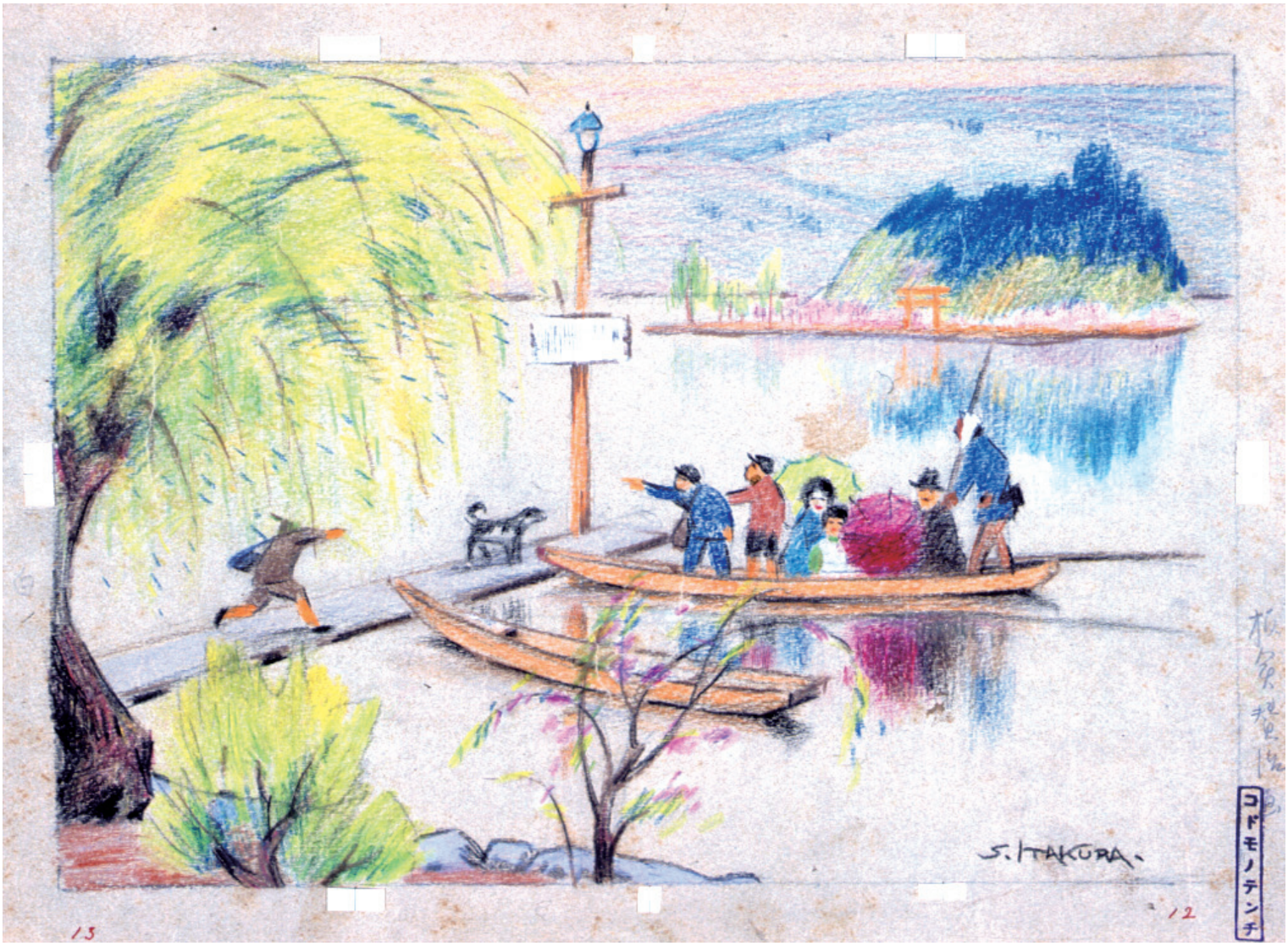
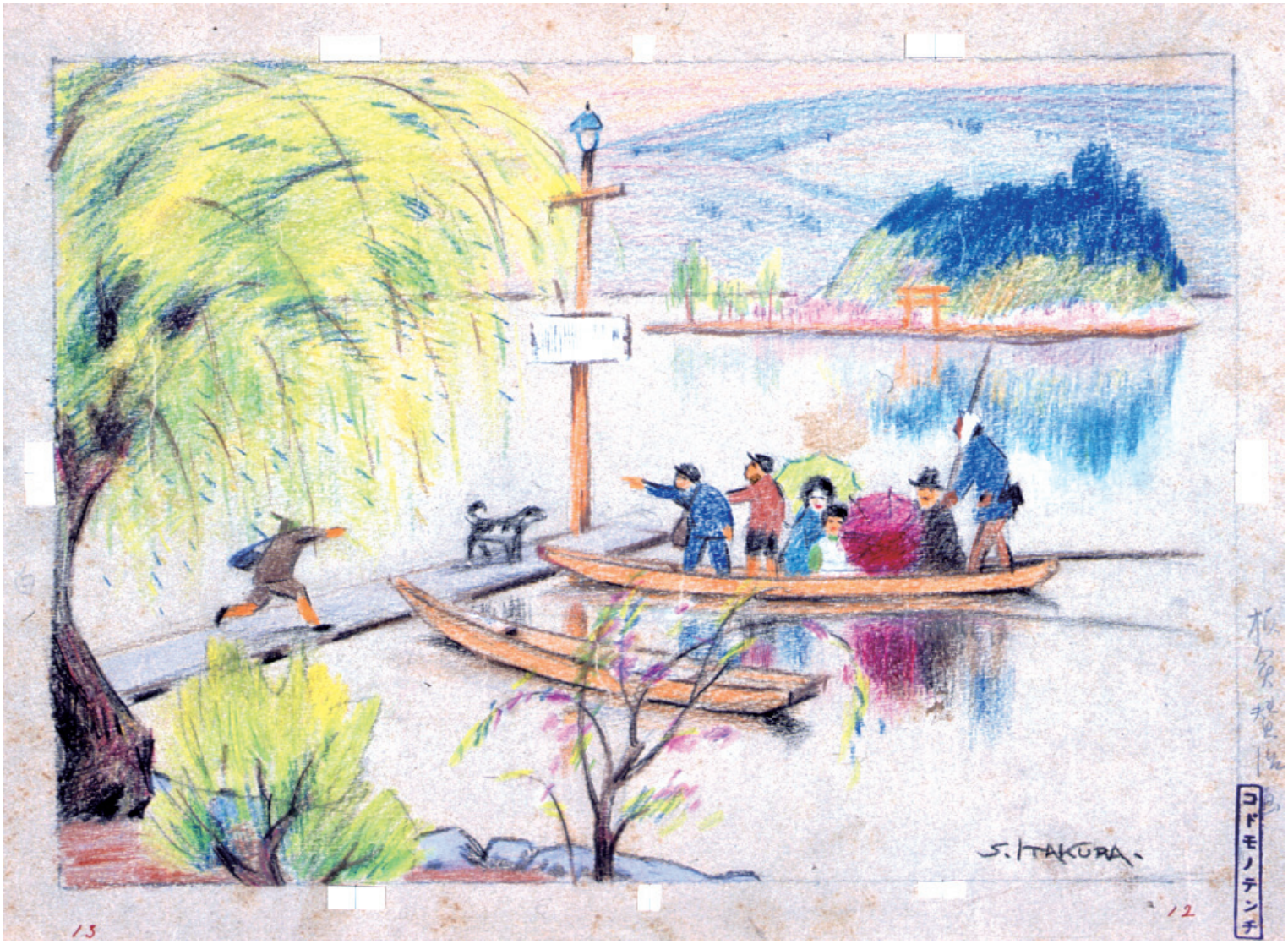


大賞

山口県光市　横道（よこみち）　玄（ひかる）（中1）

カッパの世界では

カッパの世界は、いつもアバウトです。魚の長さを言う時も手で「このくらい」と言い長さの単位もありません。でもこれではいけないと思ったカッパの王様が「これからあの舟に人が乗って舟が沈んだ長さを長さの単位とし『一人長さ、二人長さ』と決める」と通達しました。カッパの一人が今日取った魚の長さはなん人長さかなあと計りに行きました。五人長さです。横で見ていたもう一人のカッパが「僕が昨日測った魚は二人長さだったけど君が今持っているのより大きかった」と言いました。カッパたちは王様に「長さが毎回違います」と言いに行きましたが、「まあ。それでいいだろう」とあくまでもアバウトなカッパの世界でした。



準大賞

茨城県古河市　高松（たかまつ）　歩花（ほのか）（小6）

正転世界への旅

僕の家族は船で旅をしている。８歳の誕生日に旅の目的を教えられて、10歳の誕生日から旅に連れて行ってくれる。今日は僕の妹の８歳の誕生日だからお父さんに教わった事を妹に教える。「僕達が住んでいる反転世界の水面に反射した世界の中を正転世界。逆に正転世界の水面に反射した世界の中が反転世界だ。水面を見れば相手の世界が見えるけど、向こう側へ行くことはできない。だけど唯一大雨が降ると反対側の世界に水が届いて、その水を泳いでいくと反対側の世界に行けるという噂があるんだ。僕達は正転世界を目指して旅をしているんだよ。」そして今日は僕が10歳の誕生日から楽しみにしていた大雨の日！僕の新たな物語が幕を開ける！

入選

茨城県古河市　相沢（あいざわ）　安璃（あんり）（小6）

三太クロース

クリスマスイブの夜中。庄太は目を覚ましてしまったので、下の階に下りていきました。するとそこでは、見知らぬ男の子が庄太のお願いしたプレゼントで遊んでいます。庄太に気づいたのか、その子はびくっとして立ち上がって自己紹介をし始めました。その子の名前は三太。どうやら本物のサンタはかぜを引いてしまって、その孫の三太が代わりにプレゼントを配っていたのでした。しかしいくらサンタの孫といってもおもちゃの誘惑にたえられず、遊んでしまっていたのでした。妹も下りてきたのでせっかくだからと、いっしょに庄太のプレゼントおもちゃの鉄道で遊びました。次の日、学校に行くと、ろう下で三太とすれちがいました。…あれ？

入選

茨城県古河市　芦野（あしの）　秀明（ひであき）（小2）

ぼくたちの世界

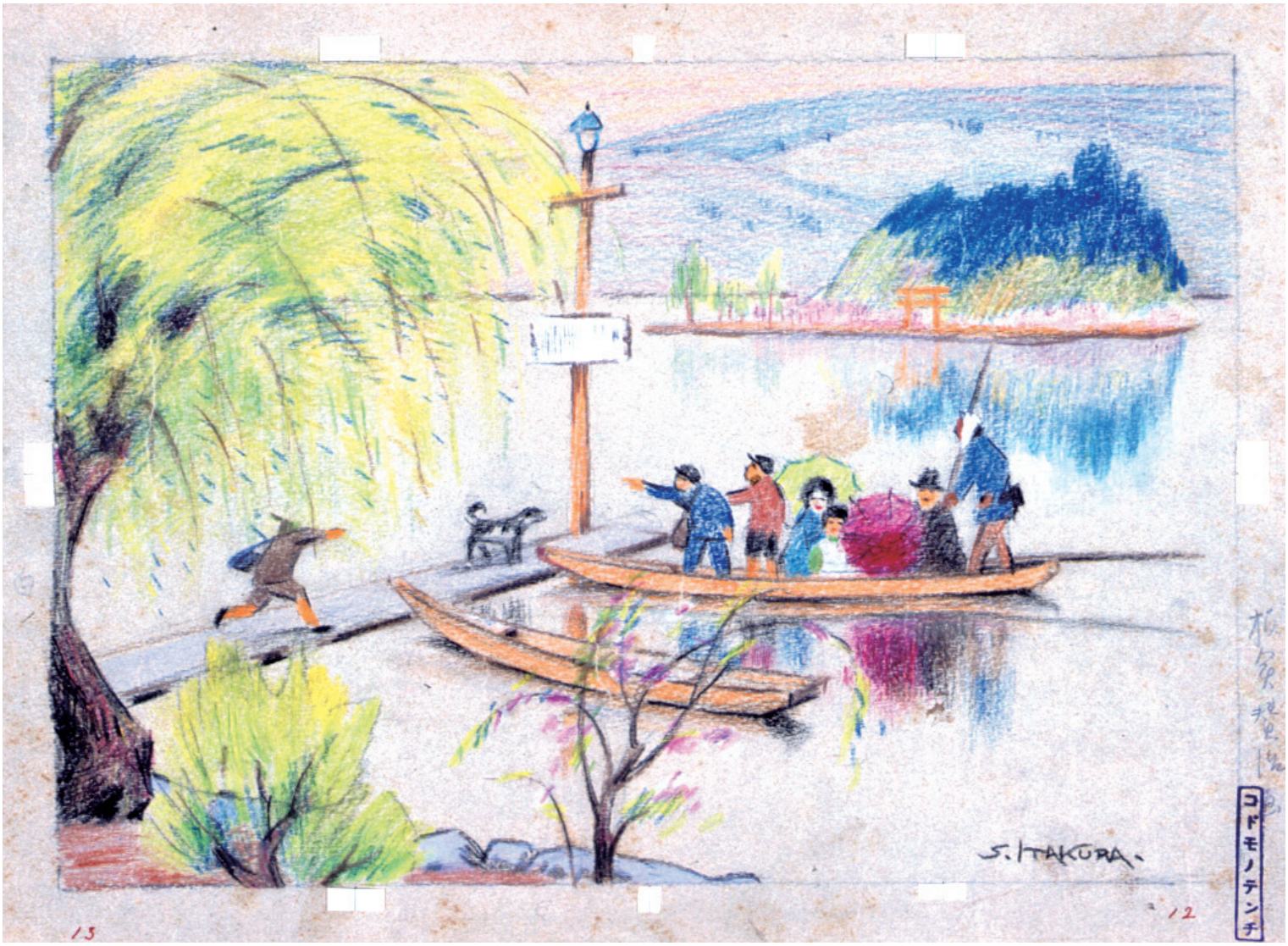
ぼくは、汽車の運転手。お客さんを乗せて走る。今日はどこへ行こうかな。街を出てトンネルを抜けて海の見えるところまで。

ぼくはどこへだって行ける。海の中だって空だって飛べる。目の前には虹の橋が架っている。僕は汽車の運転手。

わたしは、この街の町長さん。わたしの街には汽車が走っている。今日は何をつくろうかな。駅をつくってトンネルをつくって港をつくって。

わたしは何でもつくれる。ぬいぐるみが泳ぐ海だってお菓子の森だってつくれる。頭の中には素敵な街が広がっている。わたしはこの街の町長さん。

ぼくは今日なにになろうかな。



入選

茨城県古河市　尾花（おばな）　実咲（みさき）（中2）

そらと空

ぼくの名前はそら。十才の犬。とても晴れたきれいな空の日にやって来たからその名前が付けられた。名前をつけてくれたのはこの家のお姉ちゃん。十年間いつも一緒だった。

そのお姉ちゃんが今朝、泣きそうな顔でぼくを見つめて言った。

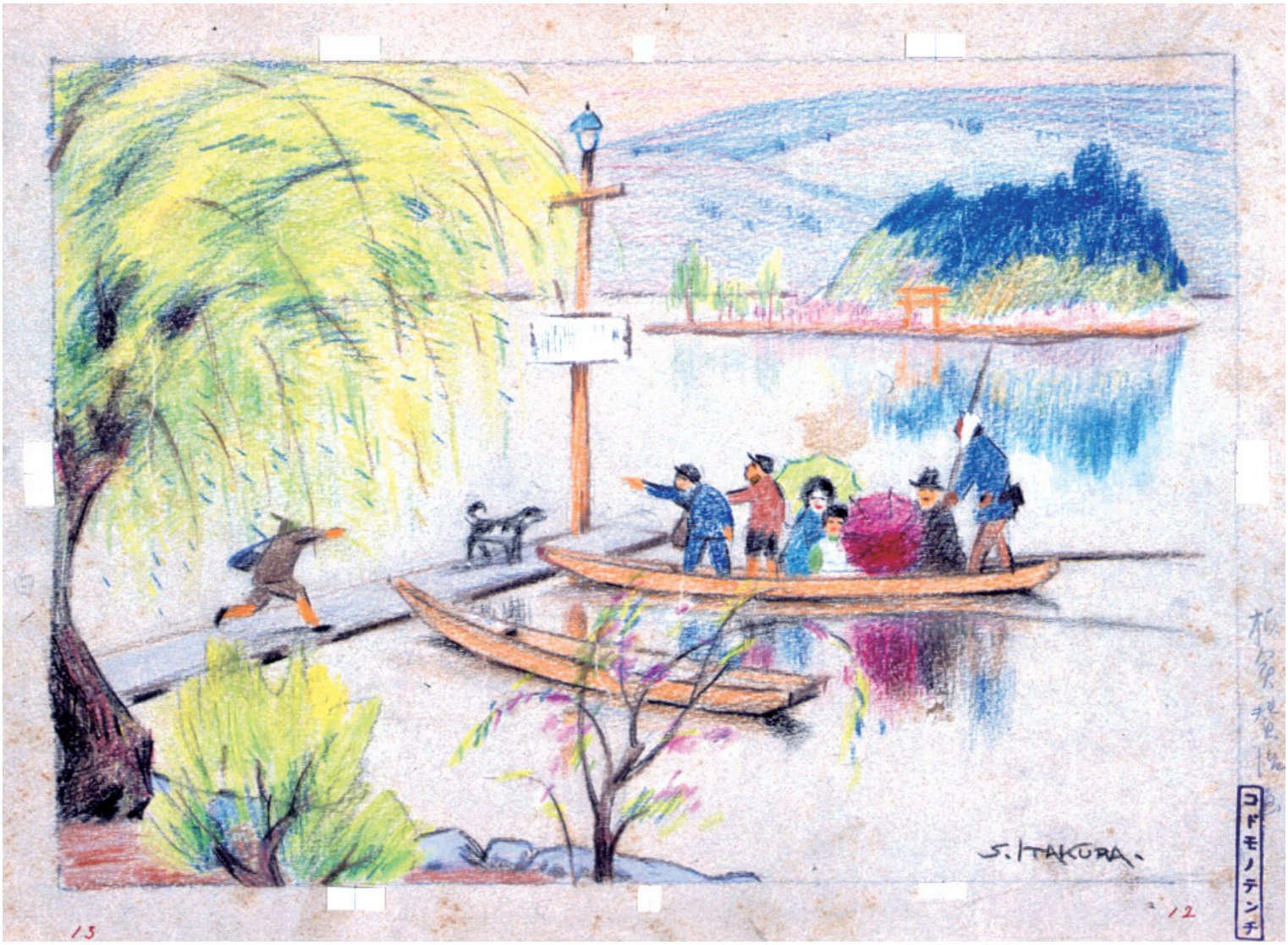
「そら、私がおよめに行っても元気でね。」

そう言うとおめかしして舟に乗った。ぼくは追いかけてさけんだ。

「ワンワンワン！」

行かないで、と何度もさけんだ。

今日もあの日と同じ、よく晴れたきれいな空だった。でもお姉ちゃんはそんな空よりももっときれいだった。これは幸せなお別れだと分かり、ぼくは涙をこらえて空を見上げた。

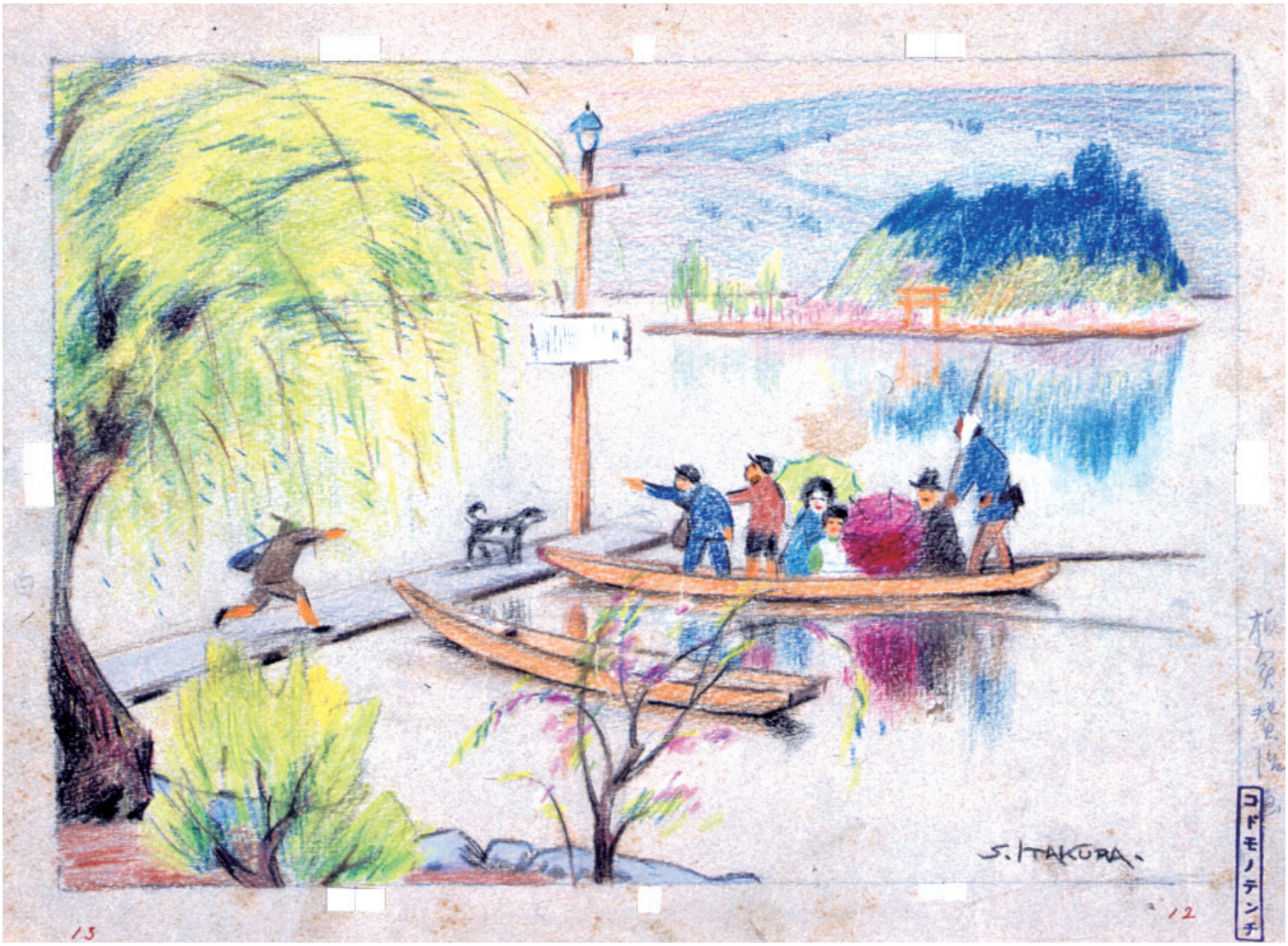


入選

茨城県古河市　栗原（くりはら）　葵衣（あおい）（中1）

春

「やっと描けた。」ずっと、描いては捨ててを繰り返したこの絵は、私が思う「春」を詰め込んだ絵だ。春に触れ、嬉しい気持ちに浸っていると、中に腕が入っていく。混乱しているうちに、見える世界が変わっていた。見た事のある景色、きっと絵の中だろう。中に入れた喜びが大きかったからか、自分でも驚くぐらい冷静だった。私の理想の春。絵で見るより立体的で生き生きしている。ずっとこの絵と居たい。そんなことを想いながら眠りに落ちた。目が覚める。見慣れた部屋と未完成な絵。あれは夢だったのか、と白い春を見て思う。ある意味「ずっとこの絵と居られる」のかもしれない。私は筆を握り続ける。この絵が本当の「春」を乗せるまで。



入選

茨城県古河市　後藤（ごとう）　沙綾（さあや）（小2）

ぼく、はくだよ

ぼくの名前はハク。小犬のころ毛がまっ白で、大すきなかぞくがつけてくれたんだ。でも十年前、とつぜんかぞくはぼくをおいて、ふねでとおくへ行ってしまった。

ふなつきばのやなぎの木のえだが、風にふかれてサラサラと音をたてた。その音をたよりにゆっくり歩いた。ふねが止まった。

「なつかしいな。あそこでよくあそんだよな。」

かぞくがかえってきた。声もにおいもおぼえている。うれしくてしっぽをふってかおを上げた。友だちが一人かけよってきてたのしそうに話している。でも、よごれてまっ白ではないぼくには気づいてくれない。忘れちゃったんだね。としをとって、白くなった目からなみだがこぼれた。

入選

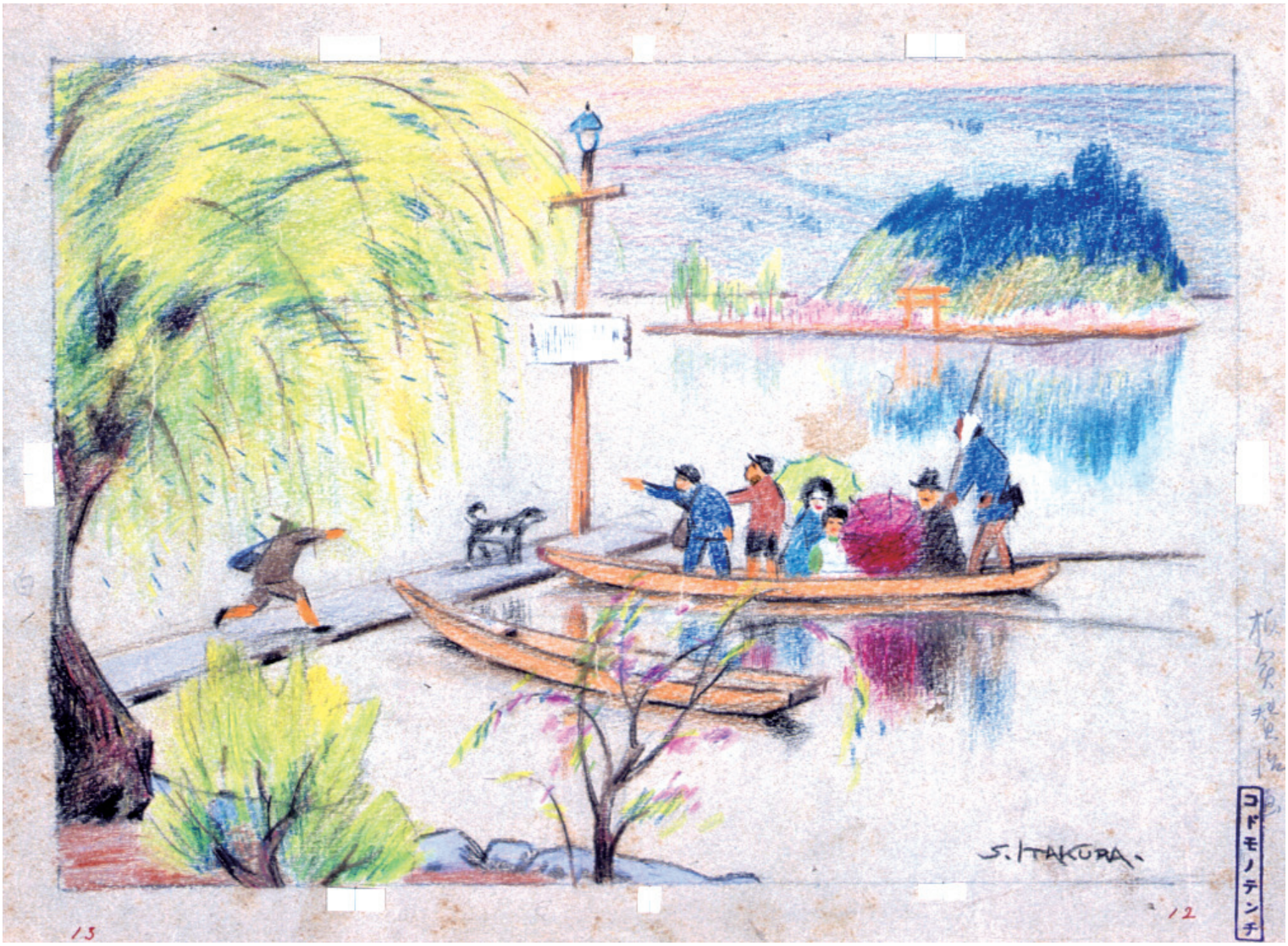
茨城県古河市　駒井（こまい）　大悟（だいご）（小1）

そらとぶきしゃにのって

ぼくはそらとぶきしゃにのってせかいじゅうをたびしたんだ。

ブラジルではカーニバルでおどるダディくんとあった。「ダディくんもいっしょにいこう。」メキシコではリューくん、トルコではディラくん、ブータンではニマちゃんをのせて。「ぼくいろいろなくにのおいしいものがたべたいんだ。」きしゃのなかで、それぞれうでをふるいおいしいごはんをかこんでパーティがはじまりました。ダディくんはシュラスコ、リューくんはタコス、ディラくんはケバブ、ニマちゃんはチーズりょうりをつくってくれたよ。もちろんぼくはおすし。

ぼくはそらとぶきしゃにのってせかいじゅうにおともだちができたんだ。



入選

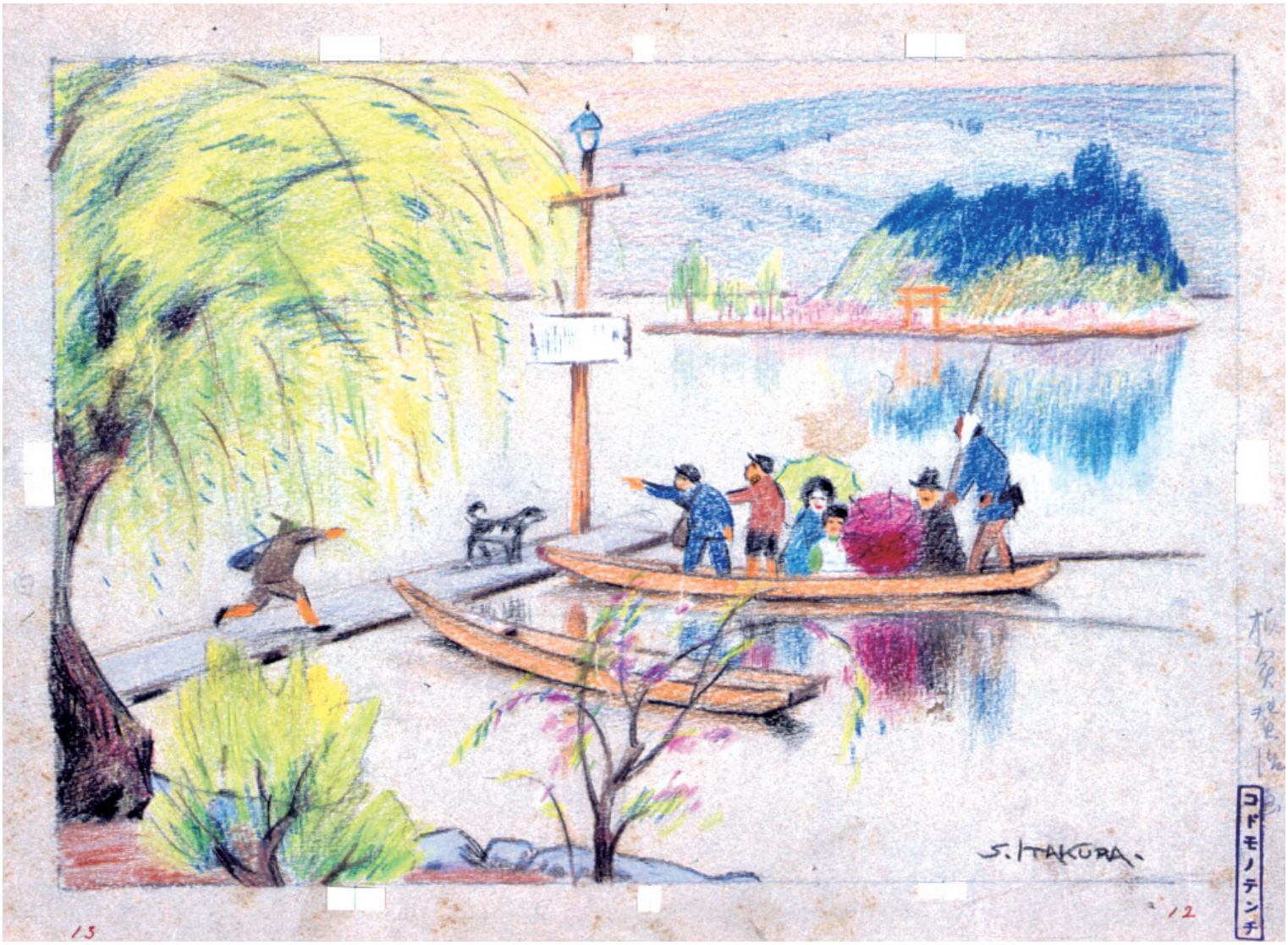
茨城県古河市　酒井（さかい）　百合子（ゆりこ）（小5）

心の島

このお話は、ある町に住んでいる、小さな女の子のお話です。

私は今日、和船に乗りました。そこに乗っていたおじいさんから、心の島のお話をしてもらいました。こんなお話です。

「心の島っていうのは、てっぺんが向日葵色になっているんだ。それが、喜びだよ。私達が嬉しいって思ったりすると、あそこが輝くのだよ。本当に綺麗だよ。そして、その下の桃色のところが悲しみさ。悲しいって嫌なことかもしれないね。けれど頑張ろうっていう気持ちができると、光がすうっと広がっていくのだよ。あれを見ると嬉しくなるよ。」とおじいさんはにこにこしながら言いました。その時、無数の何かが美しく輝きました。



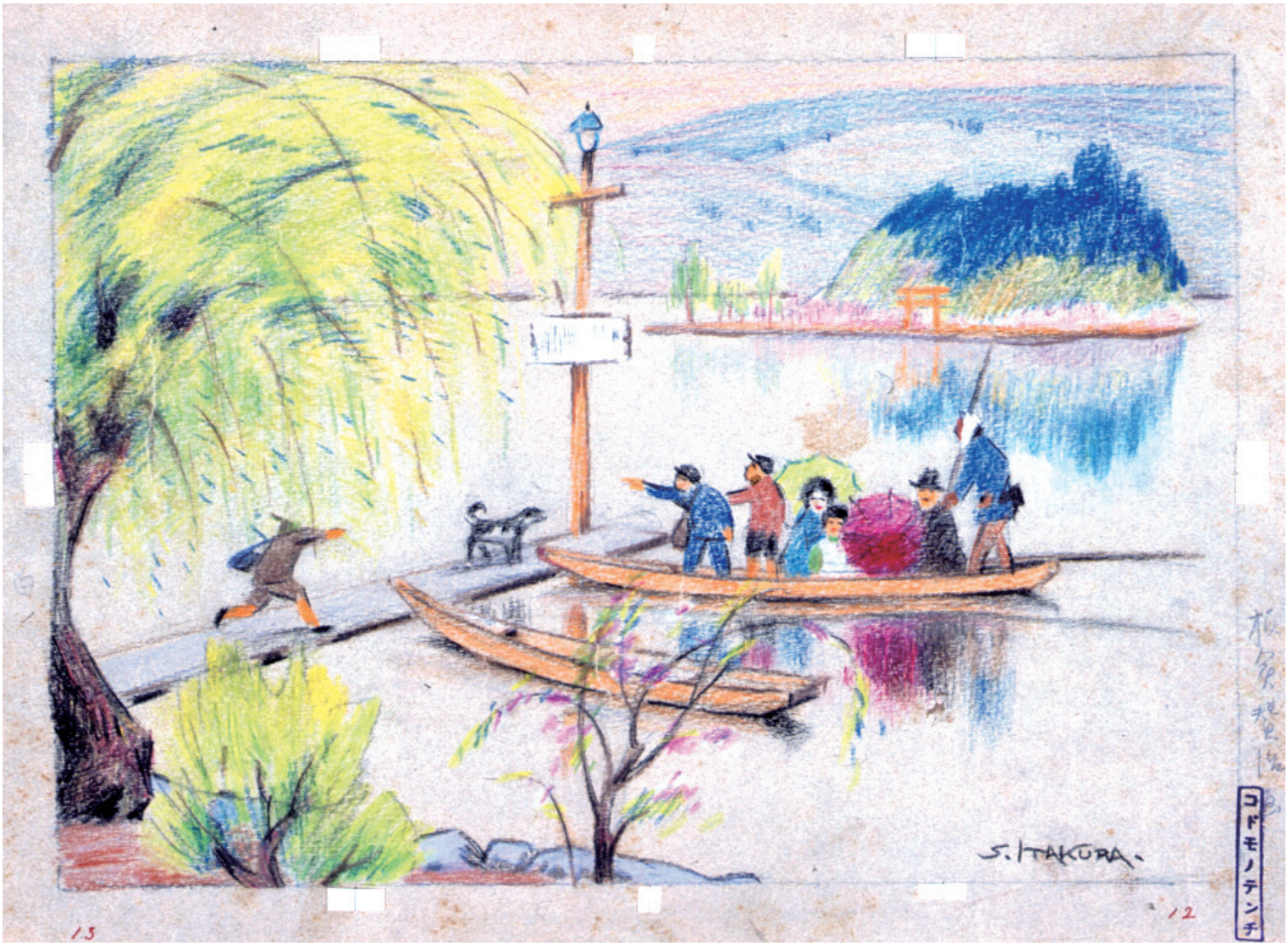
入選

茨城県古河市　坂本（さかもと）　果乃葉（かのは）（小5）

犬のたからもの

犬は、この島が好きだった。でも、犬の飼い主はあまりこの島が好きではなかった。もともと、母がこの島に家を建て、無理やりこの島に連れて来られたのだ。母はこの島を、なぜかとても気に入っていた。「前の家に帰りたい」と言っても、はぐらかされるだけ。当時学生だった飼い主は、仕方なくここにいた、とある時話してくれた。でも今はちがう。大人になり、お金をため、都会に旅立とうとしている。

犬は、この島が好きだった。飼い主は知らない。近くの丘から見る夕日の絶景も、花が咲き乱れる中で聞く小鳥の歌の心地よさも。だから犬は、飼い主の乗る舟とは逆に走る。戻れの声も、やなぎの木が揺れかき消した。



入選

茨城県古河市　椎名（しいな）　莉子（りこ）（小1）

いぬのポチ　いばらきをめざす

ぼくはいぬのポチ。おにたいじにいこうとおもっている。あるひぼくは、かいぬしのたつさんに「おにのところにつれていってくれ。」とたのんだ。でも、ぼくはいぬごだったからつたわらなかった。だから、おにたいじにいくのはやめて、ねこをたおすことにした。

しかしぼくはねこに「シャーッ」とされてにげだした。たつさんは、ぼくをおいかけてきた。ぼくは、ふなつきばにたどりついた。ふねにのってとちぎからいばらきにいこうとしたが、ふねにのっているひとに「いぬいやだ。きらい。」といわれてのれなかった。しかたなく、ぼくはふねにのるのをあきらめて、はしっていくことにした。「いばらきには、おにがいるかなあ。」

入選

茨城県古河市　菅谷（すがや）　真弘（まこ）（小1）

ゆめのきかんしゃ

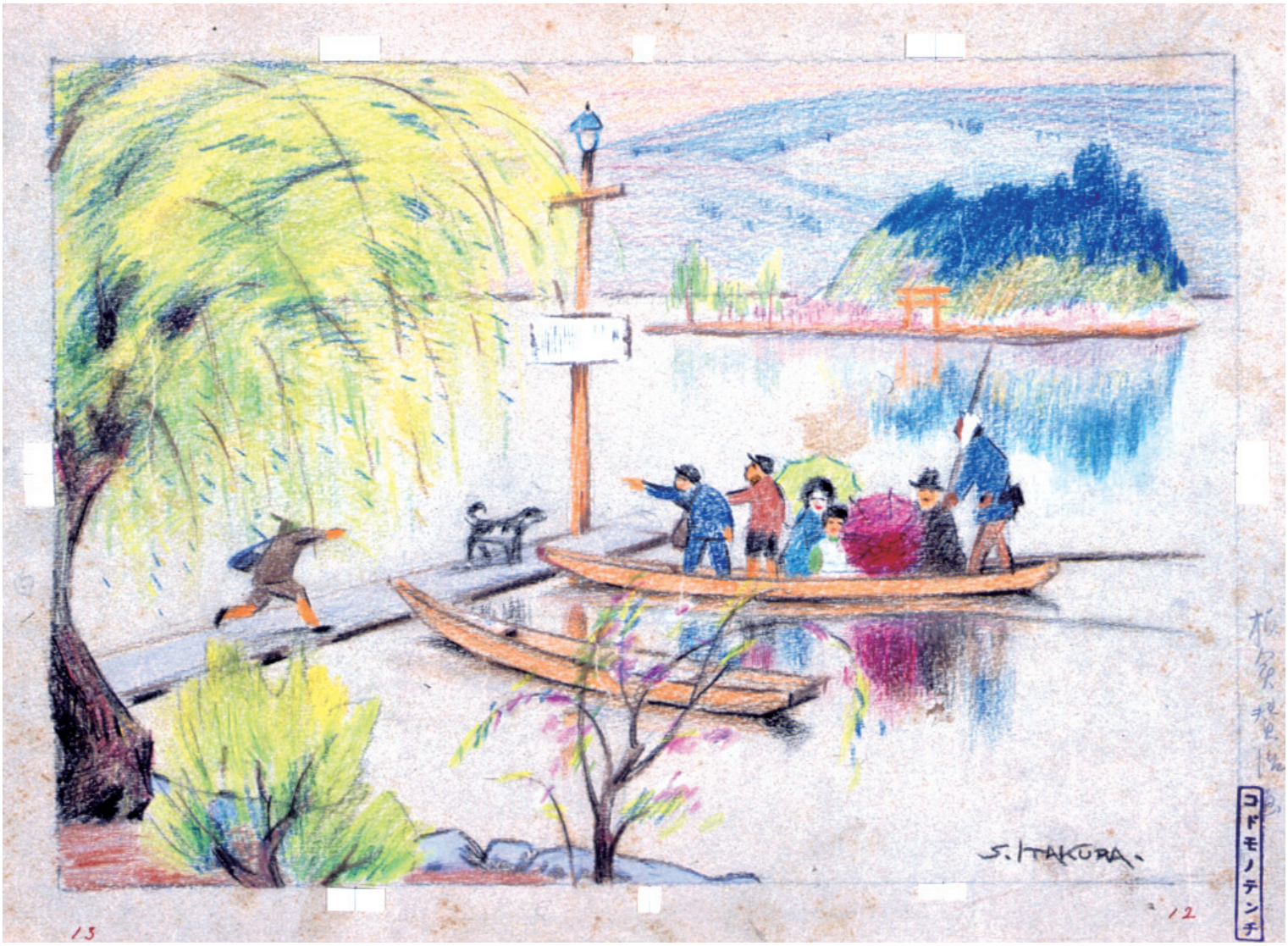
おねえちゃん、おねえちゃんはえきちょうさんだよ。わたしはおきゃくさんのおせわとあんないがかり、たろうくんはきかんしゃのうんてんしゅさん。

もうすぐきかんしゃは、しあわせえきにとうちゃくしまあす。しあわせえきには、おともだちがきかんしゃをまっています。

みんな、おまちどおさまあ。さあ、のってくださあい。これからこのきかんしゃは、みんなのゆめにむかってはしりまあす。

わたし、れすとらんのてんいんさん、ぼくはしょうぼうしさん、おまわりさん、ほいくえんのせんせい、かんごしさん・・・

さあ、みんなのゆめにむかってしゅっぱつだあ。



入選

茨城県古河市　諏訪（すわ）　結子（ゆいこ）（小1）

おいていかれたおとうさん

きょうは、かぞくであたみにりょこうにいきます。ふねがでようとしたとき、みんなが、「なにかおおきなわすれものをしているきがする。なんだろう？」とはなしていたら、おとうさんが「おいていかないでくれー」といった。おとうさんはあさから「うまい、うまい」といいながら、おまんじゅうを3つもたべたから、おなかがいたくてがまんできず、ずっとトイレにいたのでおくれてしまいました。

「おまんじゅうは、あさたべずにがまんをしておやつにすればいいのに、おとうさんはやくはしって」と、みんなでわらいながらいいました。おとうさんはぶじまにあいました。

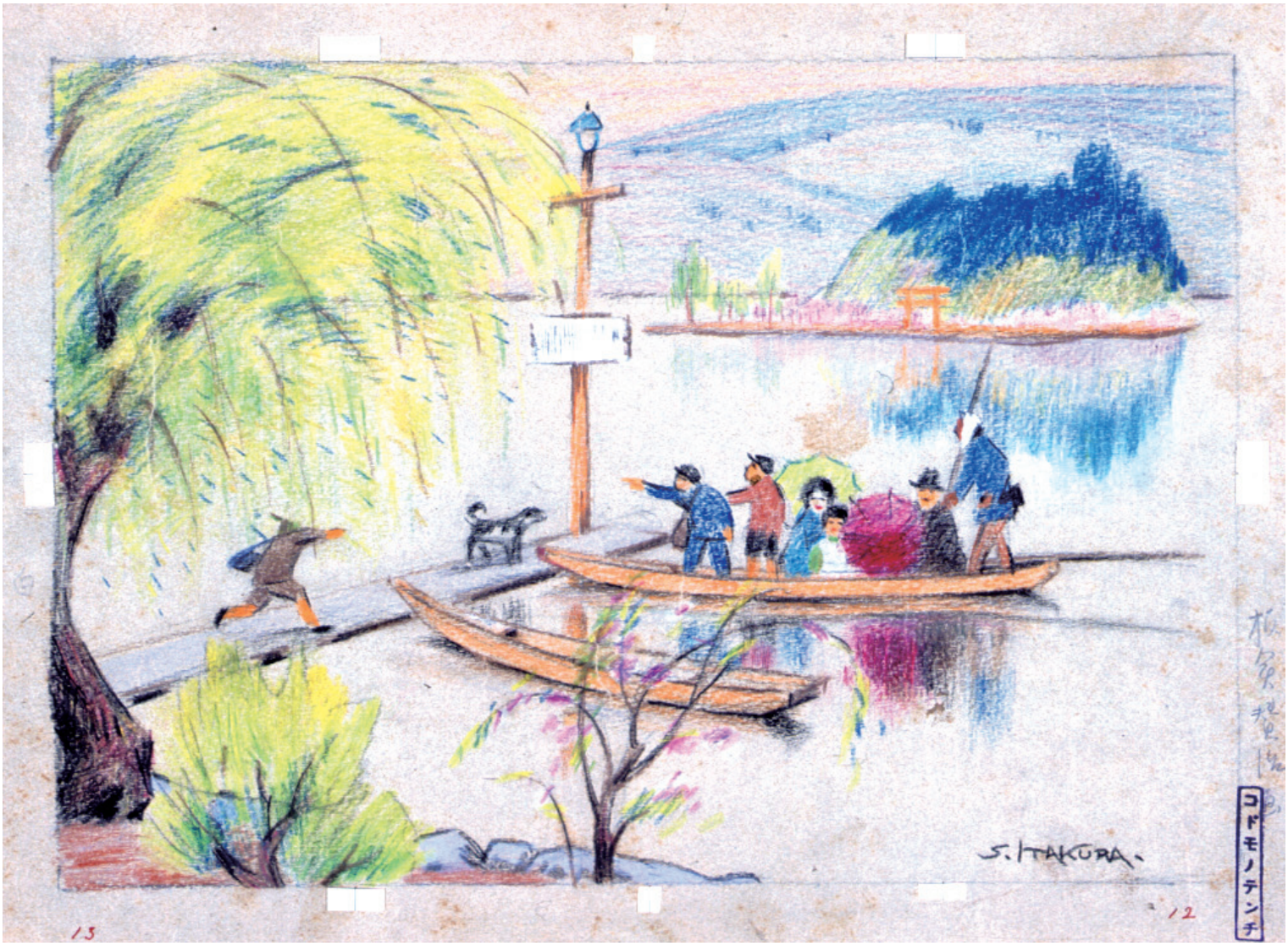
たのしいりょこうのはじまりです。

入選

茨城県古河市　永木（ながき）　日彩（ひいろ）（中3）

夢の世界と現実の世界

この列車はどこまでも走る。大勢の人を乗せて。大人も子供も見送る。日の丸を片手に。子供達は憧れて真似をする。列車、レール、イスなど、あらゆる物を使って。どこが目的地なのか、わからない。きっと楽しい場所だろう。大きな家、森、きれいな橋がいっぱいあるのだろうか。毎日、同じ遊びを繰り返す、何回も、何回も。あの列車に乗るのが夢だから。遊ぶ子供達が減っていく。少しずつ、少しずつ。ある時、一人の子が話した。「あの列車は、人をさらっていく、恐ろしい乗り物なんだって。」二人は顔を見合わせて窓からのぞくと、きのこのような雲と黒い雨が町を覆っていた。あの噂の幻のトンネルを抜けたら、戦争のない、平和な世界が待っているのかなあ。



入選

茨城県古河市　野本（のもと）　一希（いつき）（小1）

びせいぶつ

「たいへんだーブクブクいけがきたなくなっている。どうしよう。」

にんげんのふりをしていたびせいぶつたちがもとのすがたにもどっていくよ。

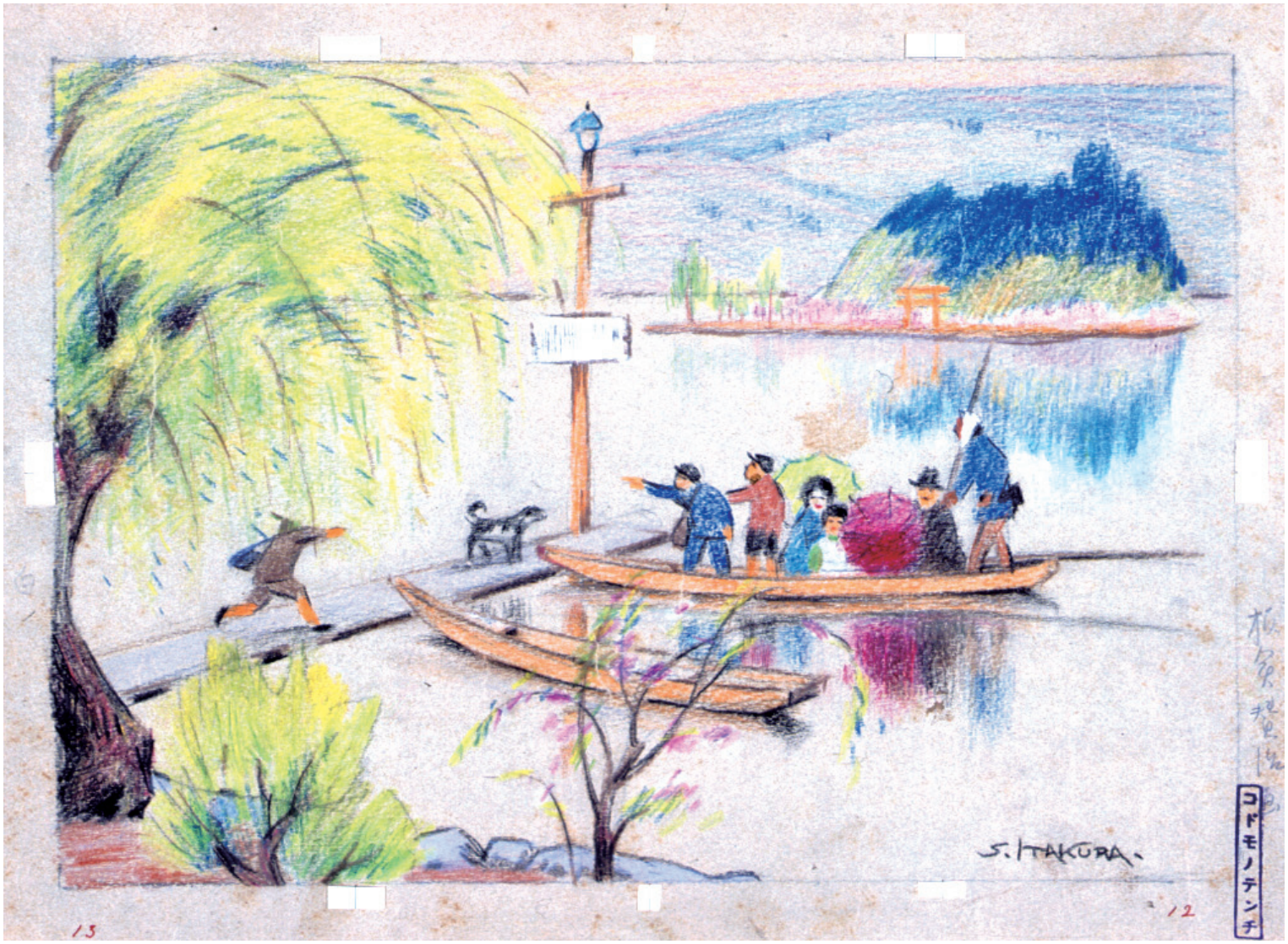
まずはくまむしくんが、ゆっくりあるいて水をきれいにするよ。

つりがねむしくんは、つりざおみたいに、のびたり、ちぢんだりしながらおそうじする。

ラッパのかたちのぼうしをかぶったおじさんがラッパむし。お口のまわりのおひげでおそうじするよ。

いぬさんにばけていたふとひげむしくん。ながいおひげでおよぐよ。

びせいぶつくんたちのおかげでブクブクいけはきれいになった。「ぼくらのおかげさ。」



入選

自由

茨城県古河市　匿　名（中3）

飼い主から逃げてしまった犬がいる。自分と同じだなと思う。私は逃げてしまったのだ。ずっと自由になりたいという願望をもっていた。両親の気持ちも考えず、居場所も告げず「働く。」とだけ言って家をでていった。あの犬のように告げられないのではなく、私は告げなかったのだ。あの犬も自由になりたいのだろうか。守られている立場での自由は制限されることもあるが常に安心できる。私はもっと早くそのことに気づきたかった。ずっと大切にされていることと縛られていることを区別できていなかった。私は戻ることはできないがあの犬には守ってくれる人がすぐそばにいる。「飼い主のもとへ行きなさい。」私のような後悔はしてほしくない。犬であっても。

入選

茨城県古河市　柳田（やなぎだ）　萌果（もか）（小6）

普通の子供と本当の僕。

僕は今、かわったおもちゃで遊んでいる。でも、楽しいとは思わない。でも僕は子供だし、弟と妹のためにも、父さん母さんのためにも僕は「普通の子供」を演じないといけない。こんなことをしていてもいまいち子供の気持ちは分からないし、疲れる。父さんが買ってきてくれたこの機関車のおもちゃはなかなか手に入らない物らしい。だけど僕はどうでもいい。それなら僕は本当の機関車が見たかった。だけど僕は喜ぶ。「本当の僕」がばれないように。完璧なお面をつけて、弟たちを見ていた。弟たちの笑顔は本物で少し羨ましい。そんなことを思いながら、床に落ちていた白い旗を拾った。旗の端のほうに小さく、「本当のお兄ちゃんは。」と書かれていた。

入選

茨城県古河市　若旅（わかたび）　咲翔（さくと）（小6）

あの日の伝言

「これが自分で動いたらなぁ。」

そう話しながら、三人は遊んでいると、

「未来では機関車は自分で考えて動くよ。」

と言う声がする。そこには一人の少年がいる。見たこともない沢山のおもちゃを持って。不思議に思いながらも、四人は一緒に一日中遊んだ。夜遅くまで遊ぶと、その少年はふとといなくなっていた。目覚めると朝…。目の前には今までと変わらない機関車しかない。

覚えているのは、名前も知らない未来の少年が教えてくれたこと。おもちゃは自分で考えて動くようになると。人工知能という言葉が世に出る何十年も前の話。三人はあの日の喜びを実現しようと努力する。あの日の出来事が現実となるのは今日かもしれない。